ミュケナイ期ピュロス王国の宗教と王権

―― ポセイドーン崇拝とポトニア崇拝 ――

山　川　廣　司

は　じ　め　に

筆者は以前線文字B粘土板文書を分析して、ピュロス王国におけるポセイドーン崇拝やポトニア崇拝について検討したことがあるが[1)]、平成23年度～平成25年度科学研究費補助金基盤研究C（一般）の交付を受け、改めてミノア期からミュケナイ期の宗教の諸相と王権の関係について、平成23年度はミノア期を、平成24年度はミュケナイ期を中心に考察してきた。

ところでE-, F-, G-, T-, U-シリーズに分類されているピュロスやクノッソス出土の線文字B粘土板文書は、オリュンポスの12神をはじめとしてギリシア系・非ギリシア系を連想させる雑多な神々の名前が記されているが、そこではそれぞれの神々がもつ職能や特性、その影響などを示すものではなく、主として儀式の際の奉納品の受領者として名前が列記されているに過ぎない。線文字B文書から読み取れる神の名前[2)]（人名の可能性もある）として、ゼウス（di-we（dat.））、大母神（di-u-ja, di-wi-ja）、ポトニア女神（po-ti-ni-ja）、ヘーラー（e-ra）、ポセイドーン（po-se-da-o）、アレース（a-re, e-nu-wa-ri-jo（dat.）エヌアリオスはアレースの呼称の１つであるが、後代には別人となる）、アポローン（pa-ja-wo-ne、パイエウォンは後代にアポローンの呼称となっている）、ヘルメース（e-ma-a_2（dat.））、アテーナー（a-ta-na）、アルテミス（a-ti-mi-te（dat.））、ディオニューソス（di-wo-nu-so）、ヘーファイストス（a-pa-i-ti-jo）、デーメー

テール（da-ma-te）、その他下位の神々[3]としてエイレイテュイア女神（e-re-u-ti-ja, お産の神）、エリニュス（e-ri-nu, 復讐の女神）、ハト（聖霊）女神（pe-re-swa（dat.））、また後世には見られないミュケナイ期の神々として、マリネウス（ma-ri-ne-we（dat.））、コマウェンテイア女神（ko-ma-we-te-ja）、ゼウスの息子？（di-ri-mi-jo di-wo）等が列挙されている。

この時期の宗教の研究に際しては、R.キャスルデンRodney Castleden[4]も指摘しているように、１．活用できる資料が遺跡、印章・宗教聖具などの遺物、フレスコ画画像などのいわゆる外的資料が中心になること、２．ミノア宗教とミュケナイ宗教の表面的類似性によって誤解や混同が生じていること、３．ミノア・ミュケナイ期に関する資料が古典期の宗教信条や宗教儀式にも利用されていることなどの問題点がある。

もちろん文字史料として線文字B文書はあるが、例えばピュロス文書は王国崩壊直前の王宮の財産管理を記録する経済文書であり、宗教そのものを扱ったものではない。このような状況のなかで敢えて宗教について採り上げるが、ここでは宗教教義等の宗教内容についての検討ではなく、むしろ文書などから辿れるミュケナイ期の宗教儀式の様態や王権が権力維持・強化のために宗教をどのように利用していたのかといった点について、特にミュケナイ期ピュロス王国において最も重要視されていたポセイドーン神とポトニア女神崇拝を中心に考察したい。

１．ポセイドーン神（*Ποσειδῶν, Poseidōn*）[5]について

最初にポセイドーン神について概観したい。ギリシア神話では、ポセイドーンはクロノスとレアの子で、オリュンポスの神々の中ではゼウスに次ぐ地位にあり、「大地」、「地震」、「水」、「馬」などの神性を有する。彼はクロノスのようなギリシア先住民の神ではなく、印欧系民族の第１次移動の際にギリシアに入ってきた神で、古形Poseidāōnは「大地神Lord of Earth」、「大地の夫Husband of Earth」と説明され、最も重要な称号が「地震の神Earthshaker」で

あった。また海や航海に関係する神「海神」として崇拝されていたが、彼の妻アムピトリーテー Amphitriteは、海神ネーレウスNēreusとドーリスDōrisの娘であり、その他水の神オーケアノスŌkeanosや種々の川神の娘や泉のニンフなど多くの女性たちとの関係から、水との結びつきが推察される。大地や水などの職能から、時として「生育（Phytalmios）の神」としても崇拝された（Paus. Ⅱ 32.8, Plut.*Mor*.675-676）。「馬の神Hippios」の神性については、⑴メドゥーサMedousa（古い大地の女神）と交わって神馬ペーガソスPēgasosを、デーメーテールと牡馬の形で交わって神馬アレイオーンAreiōnを生んだこと、⑵女神アテーナーとアッティカの守護神の地位を争った時に馬を創り出し、それを御する術を人間に授けたこと、⑶印欧語系民族が第１次民族移動でギリシアに侵入した際に馬をもたらしたこと等が挙げられる。いずれにせよ、印欧語系民族の神としてギリシアにもたらされたポセイドーンは、先住ギリシア人の古い神々の支配権を暫時的に奪取し、ギリシア各地で崇拝されていったものと思われる。

２．ホメーロスにみられるポセイドーン崇拝（百頭牛犠牲祭）

線文字B粘土板文書が解読されて、ピュロス王国ではポセイドーン崇拝が盛大に行なわれていたことが読み取れるが、このことはホメーロスの叙事詩『オデュッセイア』第３巻の記述にも符合する。そこでは、イタカの王オデュッセウスがトロイア戦争に出征して20年の歳月が経ち、息子テーレマコスTēlemachosが父の消息を求めてピュロス王国の王ネストールNestōrが支配する居城を訪れる場面が描かれている。

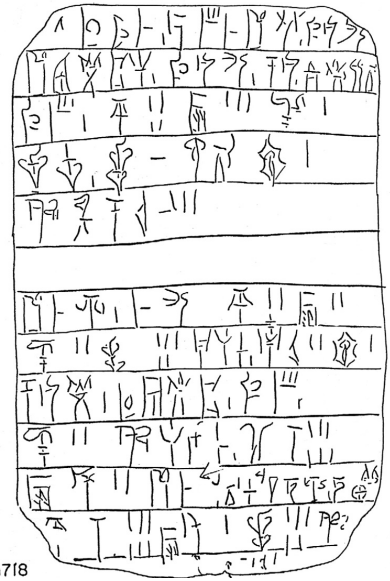
オデュッセウスの息子テーレマコスがピュロスに到着した時、海岸ではネストールをはじめとしてピュロスの人々が「大地を揺るがす大神」（ポセイドーン）に黒い牡牛の犠牲を捧げ、ヘカトンベー（百頭牛犠牲祭）を挙行しているところであった。そこでは参列者が９つの組に分かれ、各々に500人が腰を下ろし、それぞれの組には犠牲のための９頭の牡牛が用意されていた。メントー

ルに変装したアテーナー女神に導かれたテーレマコスが宴会の場に着くと、息子らとともに座を占めるネストールの周りで家来たちが宴の準備にかかっていたが、２人の姿を認めるとネストールの息子ペイシストラトスPeisistratosが真っ先に近づき、２人の手を取って宴席に誘い、坐らせた。次いで臓物を取り分け、黄金の盃に酒を注いで手渡し、パラス・アテーナーに向って「客人、ポセイダオーン神に祈りを捧げて下さい。あなた方がこの国に来られて、偶々ポセイダオーンの祭りの宴に行き遭われたのです。型の如く献酒と祈願を済まされましたら、この方に蜜の如き甘美の酒の盃を渡して献酒をさせてあげて下さい」といって盃を女神の手に置くと、アテーナーは盃を自分に先ず渡してくれた若者の聡明さと礼儀正しさを嬉しく思い、直ちにポセイダオーンに心を込めて祈った。「大地を支えるポセイダオーン神よ、願わくば私の言葉に耳を貸し、かく祈る我らの願いを無下になさらないよう。何よりも先ずネストールとそのご子息たちに輝かしい名声を、次いではピュロスに住む人々皆に見事な生贄に応えて善き応報を授け給え。さらにテーレマコスと私が快速の黒船を駆ってこの地に参った目的を見事に果たして帰国できるよう計らい給え」と祈願して、女神が盃をテーレマコスに渡すと、オデュッセウス寵愛の息子も、女神と同じように祈願した。ピュロスの人々は御神のために腿肉を焼き上げ、串を抜くと肉を切り分け、食事に入り豪勢な料理に舌鼓を打った。やがて焼き肉や葡萄酒で飲み食いした。そしてたらふくの馳走に満足しながら談笑し、飲食も一段落すると、ネストールが一座の間で口を切り、客人の出身地や訪問目的などを尋ねた。これに対しテーレマコスは、ネイオン山を戴くイタケから参ったもので、用向きはかつてネストールと共に戦い、トロイエ人の町を落とした、名にし負う堅忍不抜の父オデュッセウスについて広く世間に伝わる噂の後を追って、なにか消息が得られないかと探し求めて訪れた次第を語った（*Od.*,Ⅲ,1-101）。夕暮れが迫る頃、アテーナが一座のなかで、話しは一々もっともだと思うが、今は犠牲の牛の舌を切り、酒を水で割ってポセイドーンその他不死の神々に神酒を灌ぎ献じ、眠りにつくとしようと語った。一同はその言葉に従い、近習たちが一同の手に水を注ぎ、給仕役の若者が混酒器に並々と酒を満た

し、ポセイダオーンおよび他の神々への献酒のために数滴を一同の盃に垂らしたあと順々に注ぎ、切り取ってあった舌を火にかけると、一同は立ち上がってその上に神酒を灌奠した。こうして献酒の儀式を終えた後、心行くまで酒を飲み、家路についた（*Od.*,Ⅲ, 329-336、松平千秋訳、岩波文庫）。

以上がホメーロスに描かれた、ピュロス王国で国王が臨席して執り行なわれたポセイドーン神へのヘカトンベー祭の概要であるが、９つの組分けは線文字B文書でピュロス王国を大きく二分しているアイガレイオン山を挟んで王宮がある側（近州）に並存する主要９地区を連想させるし、この儀式に王国の戦士4,500人が整然と組み分けされて参加していたこと、また宗教儀式の手順や祭儀や宴会の様子が具体的に記述され、非常に興味深い。

３．ポセイドーンへの献納文書(1)　Un718=Docs.171



史料１　（出典：E.L.Bennett,Jr., *The Pylos Tablets Texts of the Inscriptions found 1939-1954*, p.83）

〈翻字〉

1．sa-ra-pe-da , po-se-da-o-ni , do-so-mo

2．o-wi-de-ta-i , do-so-mo , to-so , e-ke-ra$_2$-wo

3．do-se , GRA 4 VIN 3 BOS^m 1

4．tu-ro$_2$, *TURO*$_2$ 10 ko-wo , **153* 1

5．me-ri-to , v 3

6．　　*vacat*

7．o-da-a$_2$, da-mo , GRA 2 VIN 2

8．OVIS^m 2 *TURO*$_2$ 5 a-re-ro , *AREPA* v 2 **153* 1

9．to-so-de , ra-wa-ke-ta , do-se ,

10．OVIS^m 2 me-re-u-ro , FAR T 6

11．　　-ma

VIN S 2 o-da-a$_2$, wo-ro-ki-jo-ne-jo , ka-

12．GRA T 6 VIN S 1 *TURO*$_2$ 5 me-ri- [to]

13．　*vacat* [　　] s 1 v 1

〈翻訳〉

1．サラペダ（地名）において　ポセイドーンへ　／　献納品

2．宗教役人？（*owidertāhi*）に　エケラウォーンEkhelawonは以下の分量の献納品を献納するであろう。

3．穀類　384.0リットル　　葡萄酒　86.4リットル　牡牛１頭

4．チーズ　10　　羊皮　１枚

5．蜂蜜　4.8リットル

6．空白

7．以下のようにダーモス（Dāmos 共同体）は（献納するだろう）
穀類192リットル　葡萄酒57.6リットル

8．牡羊　２頭　チーズ　５　軟膏？(a-re-pa)　3.2リットル　　羊皮　１枚

9．以下のように民衆指導者（lāwāgetās）は献納するだろう。

10．牡羊　２頭　穀粉　57.6リットル

11. 葡萄酒　19.2リットル　ウォルギオーネス（宗教団体所属成員?）のカマ（KA-MA）（一種の農地保有地）は（献納するだろう）
12. 穀類　57.6リットル　　葡萄酒　9.6リットル　チーズ　5
　蜂蜜　11.2リットル

これはピュロス出土の献納文書で、Er880で小麦や葡萄、イチジクなどの果樹が植えられた広大なケケメナ地（ke-ke-me-na, 私的保有地）を持ち、王国内で重要な地位にあるエケラウォーンをはじめ、ダーモス（共同体）、土地文書Er312で王（wanax）に次ぐ地位にある民衆指導者（ラーワーゲタース）、カマ地を保有するウォルギオーネスらが、受領者であるポセイドーン神と宗教役人に数々の生産物を献納している。このように献上された献納品は、牡牛や羊、山羊は犠牲に、葡萄酒や蜂蜜は灌奠用の神酒や宴会での飲料、穀類やチーズは宴会などで使用されたのであろう。また牛皮や羊皮はアイギス（盾）や武具、儀式用の衣裳等に利用されたと思われる。

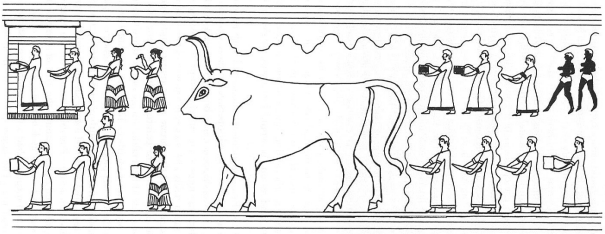


図１　ピュロス王宮メガロン前室献納行列フレスコ画（出典：Castleden, p.170）

図１はピュロス王宮のメガロン前室に描かれた献納行列のフレスコ画の復元図である。左手上が王宮（聖所）への入口で、崇拝者たちがいろいろな献納品を持って行列をしている。犠牲に捧げられる立派な牡牛が中央に大きく描かれている。また左手下に大きく描かれているのが神官であろうか。人物の大きさや服装の違いが身分の違いを示しているのだろう。崇拝者たちは手に手に壷や鉢、皿その他の献納品を携えて行列している。

４．ポセイドーンへの献納文書(2)　Es-シリーズ

献納文書のうち、Esシリーズに分類される文書は15枚あるが、大きく２つの範疇に分けられる。

(1)　13名の献納者が同じ順番で一覧に記載されている文書２枚で、Es650にはこの13名の保有地面積が記載され、Es644には毎年（we-te-i we-te-i）課される穀類の献納量が列挙されている。

(2)　Es644のように定期的に行なわれていたのかはわからないが、13名それぞれがポセイドーン神およびAi_2?-ke-te, Wedaneus, Diwieus（人名）の順序で穀物の献納を行なっている。３名の人名につては、宗教役人であるとか財務役人とかいろいろ解釈されているが、Wedaneusは他の文書にも名前が挙がっている人物で王国内の有力者とされている[7)]。(2)のポセイドーン神への献納を示す文書は同様の書式なので、そのなかの１枚を見てみる。

Es645

〈翻字〉

. 1	se-no　po-se-da-o-ne do-so-mo	GRA T	5
. 2	*ai_2?-ke-te-si , do-so-mo	GRA	v 2
. 3	we-da-ne-wo , do-so-mo	GRA	v 2
. 4	di-wi-je-we . do-so-mo	GRA	v 2
. 5	*vacat*		

〈翻訳〉

. 1	セノ	ポセイドーンへの献納	穀類	48　リットル
. 2		Ai_2?-ke-teへの献納	穀類	3.2 リットル
. 3		ウェダネウスへの献納	穀類	3.2 リットル
. 4		ディヴィエウスへの献納	穀類	3.2 リットル
. 5		空白		

ここではセノ（人名）がポセイドーン神他３名の人物に穀物の献納を行なっ

ている。彼はEs644で毎年の献納（do-so-mo）者13名にも名前を連ねており、３行目で穀類19.2リットルと少量であるが納めている。セノ自身がどういう身分であるかは不明であるが、儀式に際して穀物を献納できるような立場の者であった。Es664に列挙されている13名とそれに対応するEs文書を一覧表にすれば以下のようにまとめることができる。

文　書	献納者	受　　領　　者			
		ポセイドーン神	Ai_2?-ke-te	Wedaneus	Diwieus
Es645	Se-no	T 5	V 2	V 2	V 2
Es646	Ko-pe-re-u	1 T 5	T 1 V 4	T 1 V 4	T 1 V 4
Es647	O-po-ro-me-no	1 T 7	T 1 V 2	T 1 V 2	T 1 V 2
Es648	A-ne-o	T 5	V 1	V 1	V 1
Es949	A-re-ku-tu-ru-no-ne	2 T 5	T 2 V 4	T 2 V 4	T 2 V 4
Es651	Pi-ro-ta-wo	T 7	V 3	V 3	V 3
Es652	Ku-da-ma-ro	T 7	V 3	V 3	V 3
Es653	A_3-ki-wa-ro (a-te-mi-to do-e-ro)	T 6	V 2	V 2	V 2
Es703	We-da-ne-wo do-e-ro	T 3	V 1	V 1	V 1
Es726	Ka-ra-i	T 2	V 1	V 1	V 1
Es727	O-ka	T 7	V 3	V 3	V 3
Es728	Wo-ro-ti-ja	T 8	V 4	V 4	V 4
Es729	Ru-ko-u-ro	T 7	V 3	V 3	V 3

表１　献納者一覧表

以上から注目される点は、第１に献納者のなかに奴隷（do-e-ro）の語で示される人物が２名いることである。１人はアルテミス（A-te-mi-to）の奴隷A_3-ki-wa-roで、奴隷の所有者名と奴隷の名前が記されている。またもう１人は献納受領者でもあるウェダネウスの奴隷で名前はなく、所有者名で記されている。所謂奴隷が献納者ということは通例では理解できず、あるいは彼等は「神の奴隷」とよばれるような範疇の者と推測される。第２に献納品の受領者はポセイ

ドーン神と３名の人間である。またポセイドーン神以外の３名は同量で、かつ受領量も僅かである。ポセイドーン神の受領量は受領量総計の74～90％余の割合で、ポセイドーン神への献納が圧倒的に多い。この数値からもピュロス王国においてポセイドーン崇拝が如何に盛大に行なわれていたのかが裏付けられ、ホメーロスの記述とも一致する。第３に毎年（we-te-i we-te-i）の語彙に注目すれば、Es650のように毎年徴集される神々への献納とこの語が伴わない献納の２つの範疇が想定される。なおこの一覧表の献納量は定例の献納量に比べて約３倍にあたり、決して少量とはいえない。恐らく毎年これだけの献納を行なうことはかなり困難であると思われ、何らかの緊急の事情で必要に応じて臨時に徴集されたものと考えたい。

以上をまとめてみると、第１に線文字B文書が王宮の財産文書という性格からも、ポセイドーンへの崇拝儀式に関わる献納品の徴集を王権が定期的に行なっていた。第２にそれに加えて緊急時には必要に応じて臨時の献納も行なっていた。第３にピュロス王国では、ホメーロスに描かれたようにポセイドーン神が最も重要な神として崇拝され、王権の統轄のもとでポセイドーン神への供儀が盛んに行なわれたことが指摘できる。

５．ポトニア女神について

potnia（*Πότνια*）はpotis（王）の女性形で、「女王」「女神」の意味に解釈され、印欧語系に起源するが、神の称号としての用法は同じ意味の先ギリシア語からの借用とされている[8)]。この語はアルテミス（potnia thēron,「野獣の女神」）、アフロディーテー（erōton potnian,「愛の女神」）、ヘーラー（potnia hērē）、エウメニデスたち（potniades deinotes）、デーメーテールとコーレー（ペルセポネー）（potniai=Demeter and Core）、ニーケー（potnia Nikē,「勝利の女神」）、テティス（potnia mētēr,「母である女神」）、大地の女神（potnia chthōn）などに適用されているが、古典期に主として複数形でデーメーテールとコーレー（ペルセポネー）を示すようになった[9)]。

ポトニア（po-ti-ni-ja）はクレタの地母神崇拝との関連で注目され、その語彙が記載されている粘土板文書は、クノッソスから５～６枚、ミュケナイから３枚、ピュロスから12枚、テーベから１枚出土しているが[10]、文書数が少ないためいろいろな解釈が提示されているに過ぎない。2001年に *AEGAEUM* 誌第22号[11] がポトニアを特集し、多様な研究が公刊され、研究成果が蓄積されてきているが、文書数の少なさがネックになっている。ただ現存する文書からもミュケナイ期に崇拝の対象としてポトニアが重要な役割を果たしていたことは読み取れる。

６．文書にみえるポトニア

⑴　宗教儀式記録文書　Tn316=Docs.172

〈翻字〉（表面）

. 1　po-ro-wi-to-jo ,

PU-RO { . 2　i-je-to-qe , pa-ki-ja-si , do-ra-qe , pe-re , po-re-na-qe
. 3.　a-ke , po-ti-ni-ja AUR *215^{VAS} 1 MUL 1

. 4　ma-na-sa AUR *213^{VAS} 1 MUL 1 po-si-da-e-ja AUR *213^{VAS} 1 MUL 1

. 5　ti-ri-se-ro-e , AUR *216^{VAS} 1 do-po-ta AUR *215^{VAS} 1

. 6　*vacat*

PU-RO　. 7–10　*vacant*

（裏面）

PU-RO { . 1　i-je-to-qe , po-si-da-i-jo , a-ke-qe , wa-tu
. 2　do-ra-qe , pe-re , po-re-na-qe , a-ke -ja
. 3　AUR *215^{VAS} 1 MUL 2 qo-wi-ja , na- ［・・］, ko-ma-we-te-

PU-RO { . 4　i-je-to-qe , pe-re-*82-jo , i-pe-me-de-ja-qe di-u-ja-jo-qe
. 5　do-ra-qe , pe-re-po-re-na-qe , a-〈ke〉 , pe-re-*82 AUR *213^{VAS} 1 MUL 1
. 6　i-pe-me-de-ja AUR *213^{VAS} 1 di-u-ja AUR *213^{VAS} 1 MUL 1
. 7　e-me-a_2 , a-re-ja AUR *216^{VAS} 1 VIR 1

PU-RO
. 8　i-je-to-qe , di-u-jo , do-ra-qe , pe-re , po-re-na-qe a-ke
. 9　di-we AUR *213^{VAS} 1 VIR 1 e-ra AUR *213^{VAS} 1 MUL 1
. 10　di-ri-mi-jo└ ┘di-wo , i-je-we , AUR *213^{VAS} 1 [?]
. 11　*vacat*

PU-RO . 12–16　*vacant*

〈翻訳〉（表面）

１．プロウィストスPlowistosの月（航海の月、アッティカ暦第８番目の月、２月から３月）

２．ピュロスの人々

スパギアーネス（Spagianes, 王宮近郊にあった重要な聖域）において供儀を行ない、奉納品（dōra）を運び、

３．犠牲を先導する。ポトニア女神へ　　黄金の杯　１　女性　１

４．メナサ女神に　黄金の鉢　１　女性　１　ポシダナエヤ女神（ポセイドーンの女性形）に　　黄金の鉢　１　　女性　１

５．トリス・ヘーロース（Tris-heros）に　黄金の杯　１

ドスポタイ（dospotai, 家の主人The Lord of the House）に黄金の杯　１

６行以下　　空白

（裏面）

ピュロスの人々

１．ポセイドーンの（聖所、聖域）において供儀を行い、町（asty）が

２．献納品を運び、犠牲を先導する。

３．黄金の杯　１　女　２　グォヴィヤ（Guowia、雌牛、地方神）に　コマヴェンテイア（Komawenteia, 長い髪の、地方の女神）に

ピュロスの人々

４．プレスウァ（Preswa）の聖域、イペメディア（Iphemedeia）の聖域、ディウィア（Diwia, ２柱の女神）の聖域において供儀を行い、献納品を運び、

５．犠牲を先導する。プレスウァ女神に　黄金の鉢　１　女性　１

６．イペメディア女神に　黄金の鉢　１　２柱の女神に　黄金の鉢　１　女性

1

7．ヘルメス・アレイアス（Hermes Areias）に　黄金の杯　1　男　1

ピュロスの人々

8．ゼウス（Zeus）の聖域において供儀を行い、奉納品を運び、犠牲を先導する。

9．ゼウスに　黄金の鉢　1　男　1　ヘラに　黄金の鉢　1　女　1

10．ゼウスの（息子、祭司？）ドリミオスDrimiosに　黄金の鉢　1

拙稿「ミュケナイ時代の宗教（1）」[12] でも採り上げた文書であるが、チャドウィック[13] によれば、この文書は異例で筆跡も非常に拙い。このブック型の大型文書は両面に文字が記され、両面とも下半は空白である。しかも何度も書き直した痕跡があり、また筆跡も粗雑で、書き落としの箇所や判読しがたい部分がある。彼の推測では、文書の作成に当たって書記が十分に構想を練って書いたものではなく、何を書くのかはっきり認識していたとは思えないとし、書記は先ず片面に書き始めたが、意にそぐわなかったようで全てを消去し、粘土板を裏返して書き始めた。ところが半分も書き終えない内に気が変わり、次の節の罫線を引いたのにそのまま空白にして再び消去した反対側に書き始め、しかも記すべきことがあるかのように罫線を引いたまま終わっている。チャドウィックはその理由を文書がこの時に紛糾した会議の決定事項を記載しようとしたからではないかとし、またこのような不完全な文書が残存した理由について、もはや廃棄する時間がなかったからとし、粘土板が書かれたのが王宮崩壊直前であったと考えるなら全てが符節に合うとし、ピュロスの滅亡に関して我々が手にする僅かな情報と極めてうまく一致すると解説する。すなわち王宮崩壊直前の会議の混乱ぶり、王宮の混乱ぶりについての状況証拠といえる。

この文書でポトニア女神と関連する箇所は表面３行目で、ピュロスで春（航海の月）の儀式が挙行され、神々への献納が行なわれたが、その受領者の１人であるポトニア女神に献納品として黄金製の杯と生贄の女性１名を先導している。そこではその他４柱の神々への献納が記されている。ポトニアはa-ta-na

po-ti-ni-a（アテーナ―・ポトニア）のような限定詞はなく、単独で記載されている。恐らく限定詞を付けなくてもピュロスの人々にはどのポトニアか理解できたのであろう。また献納品の受納者として名前が挙がっているMa-na-saについては、Docs.の用語集には女神名としか説明がない。Po-si-da-e-jaについてはPosidaeiaiと読み、ポセイドーンの女性形であることから、ポセイドーンの妻アムピトリーテー Amphitriteとも思われるが、古形から「大地の女主人」との解釈も可能であろう[14)]。奇妙なことにポセイドーン神の名前がここでは記載されていない[15)]。次のトリス・ヘーロースとドスポタイへは黄金の容器の献納だけで、生贄の供出はしていない。

裏面は諸々の神々に献納品や男女の生贄が捧げられている。第１のグループがピュロスにあったポセイドーンの聖所で、第２のグループがプレスウァ、イペメディア、ディウィアの聖所で、第３グループがゼウスの聖所で、それぞれで供儀を行なっている。この時期、王国内のあちこちで神々への祈願の儀式が執り行われていたことがわかる。またpo-re-raについて，古典期のギリシアでは人間の生贄は是認されていないが、ホメーロスや悲劇作品などにも人間が祈願の生贄として神に捧げられる場面が描かれており、当時ピュロスが王国滅亡の緊急事態下にあったと想定すれば、人間犠牲が行なわれていたことは十分にあり得る[16)]。

⑵　人間の献納文書　An 1281=Docs.312

〈翻字〉

. 1　po-]ti-ni-ja , i-qe-ja

. 2　?do-so]-mo , o-pi-e-de-i

. 3　a-ka , re-u-si-wo-qe　VIR　2

. 4　au-ke-i-ja-te-we , [[i-qe-ja　VIR]]

. 5　o-na-se-u , ta-ni-ko-qe　　VIR　2

. 6　me-ta-ka-wa , po-so-ro　　VIR　1

. 7　mi-jo-qa [　　]e-we-za-no　VIR　1

. 8　a-pi-e-ra , ru-ko-ro　　VIR　1
. 9　]-a-ke-si , po-ti-ni-ja , re-si-wo　　VIR　1
. 10　au-ke-i-ja-te-we［　　］ro　　VIR　1
. 11　mi-jo-qa , ma-ra-si-jo［　　］　　VIR　1
. 12　me-ta-ka-wa , ti-ta-ra-［　　］　　VIR　1
. 13　a-pi-e-ra , ru-ko-ro　　VIR　1
. 14-15　　*vacant*

〈翻訳〉

1．馬のポトニア女神へ
2．献納品（を献納する）　その聖所において
3．A-ka（人名）とRe-u-si-wo（男性名）が　　男　２名
4．[[馬の]] Au-ke-ja-te（名前）へ　　[[男]]
5．オナセウスとTa-ni-ko（男性名）が　　男　２名
6．メタクァルワイ（女性名）とプソローン（Psolon　男性名）が 男１名
7．ミヨカ（女性名）へ　　］e-we-za-no（人名）が　　男　１名
8．アンフィエラース（女性名）へ　ルグロス（男性名）が　　男　１名
9．　］a-ke-siにおいて　ポトニア女神へ　Re-si-wo（男性名）が　男　１名
10. Au-ke-i-ja-te（男性名）へ　　］-ro（人名）が　男　１名
11. ミヨカへ　　Ma-ra-si-jo（男性名）が　男　１名
12. メタクァルワイへ　　Ti-ta-ra（男性名）が　男　１名
13. アンフィエラーズへ　　ルグロスが　　男　１名
14-15.　　空白

ここでは特にポトニアに「馬の　hippeia」の通り名が付されており、１～３行目では彼女の聖所で「馬のポトニア女神」に、名前が明記されている２人の男性への男性２名の献納割当てが記されている。i-qe-jaはi-qo（*ἵππς*）の派生形容詞で、ポトニア・ヒッペイア（*πότνια ἱππεία*）と読める。この女神については、ポセイドーンが牡馬の姿になって牝馬に化けた大地母神デーメーテールと

交わったとの伝えから、その子デスポイナと一致させる解釈もあるが、古典期のペロポネソスで馬神崇拝を示す馬に乗った女神の小立像が出土していることから、ピュロス王国でも守護神の１人として馬神崇拝が行なわれていたと思われる[17]。

また９行目でもポトニアの名前がみえるが、*Docs.*[18] は最初の語彙をpo-ti]-a-ke-siと補って地名とし、このポトニアと１行目の「馬のポトニア」と区別をすべきとしている。恐らく「ポトニア」が女神の総称として使用されていたからであろう。これらの人間の献納が何の目的で行なわれたか、文書からはわからない。

⑶　香料配給文書　Un 249

. 1 { po-ti-[ni]-ja-we-jo
{ pi-ra-jo , a-re-pa-zo-[o-] , ku-pa-ro$_2$ AROM 2 T 5
. 2　wi-ri-za　LANA 2　[　　] *157 10
. 3　[　　] *KAPO* T 6
. 4 − 5　*vacant*

１．ポトニア女神の香油作り　フィライオス　香辛料　2 T 5、
２．付根の羊毛　2　[　　] *157　10
３．　[　　]　T 6
４－５．　空白

これはポトニア女神の宗教団体に属する香油製造職人のフィライオスPhilaiosに、香料240リットルと獣脂の多い付根の部分の羊毛 ２単位、未だに品名が特定できない＊157の産品が57.6リットル配給されている。彼はポトニア女神に属する聖職組織に所属して、そこで挙行される祭祀儀式で使用される香油を作る職人で、原料と道具の配給を受けたことが記載されている。同様にポトニア女神の組織に所属して青銅の配給を受けている冶金職人の集団が注目される（後述）。

⑷　香料入オリーブ・オイル支給文書　Fr1206, Fr1225, Fr1236

Fr1206

po-ti-ni-ja , a-si-wi-ja , to-so , qe-te-jo OLE+PA　5 v 4

Aswiaiのポトニアへ　以下の量が支給される　セージ香の芳香オリーブ油150.4リットル

Fr1225

. 1　e-ra$_3$-wo , u-po-jo , po-ti-ni-ja

. 2　we-a$_2$-no-i , a-ro-pa　OLE+A　s 1

1．オリーブ・オイル　U-po-joのポトニアへ

2．衣服用の芳香入オリーブ油　　9.6リットル

Fr1236

. 1　pa-ki-ja-ni-jo , a-ko-ro , u-po-jo , po-ti-ni-ja , OLE+PA s 1 v 1

. 2　　*vacat*

1．スパギアーネス地区　U-po-joのポトニアへ　セージ香の芳香オリーブ油1.2リットル

以上の３文書は、a-si-wi-ja、u-po-joの限定詞を伴うポトニアへの芳香オイルの支給文書である。ピュロス文書には香油作り（a-re-pa-zo-o）とよばれる職人（Un267）もおり、いろいろな芳香植物から採取された香料は宗教儀式等で芳香オイル油として使用されていた。それらを最も必要とするポトニア女神の聖所でも生産されていたろうが、王宮からも儀式用に支給されたのであろう。

⑸　青銅配給文書　Jn310=Docs.253

〈翻字〉

. 1　]a-ke-re-wa , ka-ke-we , ta-ra-si-ja , e-ko-te ,

. 2　ti-qa-jo　AES　M　1　N　2　qe-ta-wo　AES　M　1　N　2

. 3　a$_3$-so-ni-jo　AES　M　1　N　2　ta-mi-je-u　AES　M　1　N　2

. 4　e-u-ru-wo-ta　AES　M　1　N　2　e-u-do-no　AES　M　1　N　2

. 5　po-ro-u-te-u　AES　M　1　N　2　wi-du-wa-ko　AES　M　1　N　2

. 6　　*vacat*

. 7　to-so-de , a-ta-ra-si-jo , ka-ke-we [　] *vacat*

. 8　pa-qo-si-jo 1 ke-we-ti 1 wa [　] re-u [　1] *vacat*

. 9　pe-ta-ro 1

. 10　　*vacat*

. 11　to-so-de , do-e-ro , ke-we-to-jo 1 i-wa-ka-o 1

. 12　pa-qo-si-jo-jo , ka-ke-we , ta-ra-si-ja , e-ko-te

. 13　〖a[　　]〗　*vacat*

. 14　po-ti-ni-ja-we-jo ka-ke-we ta-ra-si-ja e-ko-te

. 15　i-ma-di-jo AES M 2 tu-ke-ne-u AES M 3

. 16　[　　] AES M 3 i-wa-ka AES M 3

. 17　[　a-]ta-ra-si-jo pu_2-si-ja-ko 1

〈翻訳〉

1．アケレワ地区の受給冶金師が以下の（配給）量をもつ。

2．Ti-qa-jo（Thisg^{u}aios）青銅 1.5kg　　Qe-ta-wi 青銅 1.5kg

3．A_3-so-ni-jo（Aisonios）青銅 1.5kg　　Ta-mi-e-u（Tamieus）青銅 1.5kg

4．E-u-ru-wo-ta（Euwotas）青銅 1.5kg　E-u-do-no 青銅 1.5kg

5．Po-ro-u-te-u（Plouteus）青銅 1.5kg　Wi-du-wa-k 青銅 1.5kg

6．　　空白

7．非受給冶金師は以下である。

8．Pa-qo-si-jo（Panguosios）1 Ke-we-to 1 Wadileus? 1

9．Pe-ta-ro（Petalos） 1

10.　　空白

11. 奴隷たちは以下である。 Ke-we-toの（所有） 1

　I-wa-ka（Iwakhas）の（所有）1

12. Pa-qo-si-jo（Pang^{u}osios）の（所有） 1　Plouteusの（所有） 1

13. a-?　　空白

14. ポトニア女神に所属する受給冶金師が以下の（配給）量をもつ。

15. I-ma-di-jo 青銅 2kg Tu-ke-ne-u 青銅 3kg
16. [?] 青銅 3kg Iwakhas 青銅 3kg
17. 非受給鍛冶師 Pu_2?-[・] ja-ko（Phusiarkhos）

この文書は、ピュロス王国近州（王宮側）主要９地区の１つアケレワ地区の青銅冶金師への原料配給文書である。内容は４部に分かれ、第１グループはその年青銅の受給を受ける冶金師が配給量と共に名前が列挙されている。しかもその配分量は1.5kgと均一である。この主要地区には冶金師の職人集団があり、ピュロス王宮は管理している金属材料を配給し、青銅製品を貢納させていた。

第２のグループが非受給冶金師で、この年青銅の配給が受けれなかった冶金師たちで、名前だけが列挙されている。彼らは本来なら王宮から青銅の配給を受けていたが、この時輸入に頼っていた金属原材料の入手が困難な状況に陥って不足が生じ、そのためこの年は配給に与れなかったと考えられる。当時の緊迫した状況は、武器を作るため以前神殿に奉納され保管されていた青銅奉納品を中央の王宮から地方に派遣されたko-re-te, po-ro-ko-re-teとよばれる地方長官に徴収させたことを記録した青銅貢納文書Jn829が示している。

第３のグループは奴隷（do-e-ro, doulos）で、所有者名で４名が列挙されている。所有者の１人イワカースはポトニア女神に所属する冶金師として青銅の配給を受けている。これらの奴隷は冶金師たちの補助労働力として利用されたのであろう。

そして第４のグループはポトニア女神崇拝者であると同時にその女神の組織に所属して聖所のために技術を生かして製品を生産する冶金師たちであった。ここにも青銅の配給を受けれなかった非受給冶金師１名が名前で記されている。ポトニア女神に属する集団は、王国の上層部の人々と並んで土地保有に与かっており、男祭司、女祭司など存在などからも、世俗の王権とは別に宗教組織を単位として集団を作り、王権の支援を受けながら王国内での地位を確保していたと団体であったと考えられる。

ピュロス王宮の遺跡からも聖所と職人の工房が隣接する事例が見られる。「王宮中枢部の建物」に隣接して「北東の建物」と呼ばれる平屋建ての建物が

あるが、そこは部屋数６室と通路から成る王宮の仕事場（Workshop）とされ、その仕事場からは多数の壷、木製の棚板、青銅片、皮革、その他の材料を扱っている刻印文書断片等が見つかっている[19]。また南広場から入るその建物の入口に小さな聖所が設けられていたことが発掘によって明らかにされた[20]。

もう１つの事例として、ミュケナイの城塞にも王宮とは別に祭祀センターと呼ばれる聖域がある。特に西側ブロックにあった「フレスコ画の部屋」に描かれているフレスコ画（図２）が注目される。それは部屋の南東角の祭壇（91cmの高さ）背面の壁面左下及び上部の白漆喰が塗られた上に彩色されたフレスコ画である。左下のミノア様式の頭飾りを付けた麦の穂束を持つ女性とその背後に女神を護る空想上の動物グリフィンが描かれていることから、チャドウィック[21]はポトニアに比定しているが、キャッスルデン[22]はその女性は麦の穂束を持って祭壇に近づく女性崇拝者あるいは女祭司ではないかと推測し、背後を疾走するグリフィンは必ずしも前面の女性が女神であることを意味するのではなく、近辺にいることを暗示しているに過ぎないと解釈している。この女性が女神あるいは女祭司か崇拝者か特定できないが、小さめに描かれている点は気になるが、グリフィンに護られている点を重視すれば女神ではないかと思われる。またその左側祭壇上には、向かい合っている女神が大きく描かれれている。特に左側の女性は帽子を冠り、長いガウンを着て、手にもつ剣あるいは笏の先を地面に刺している。ホメーロスでも一対で描かれている女神ヘーラーとアテーナー女神と想定することも可能である[23]。その間に小さく２人の男性崇拝者が描かれている。被り物をし、剣を持っている女神がアテーナー女神とすれば、冶金の神でもあったアテーナー女神と見ることができる。さらにルトコフスキーは[24]、城壁近くの西

図２　女神のフレスコ画復元図
（出典：Dickinson, p.292）

側にあったフレスコ画の部屋とセンター中枢部にあった「偶像の部屋」に挟まれた部屋について、ここは聖域に関わる仕事場であり、この様な部屋が聖所に近接して設けられていることは偶然ではなく、聖所がこれらの工芸品を制作・管理していた証左だと指摘しているが、そうであれば両者に挿まれた部屋がアテーナー・ポトニアの聖所に隣接してポトニアに所属する冶金師たちの工房であり、ポトニアを崇拝する冶金師集団がそこで仕事に従事していたと推測できる[25)]。これは場所は異なるがJn310＝青銅配給文書でのポトニア女神集団への青銅の配分が行なわれた理由を示している。

以上をまとめると、第１に線文字B文書では「王に所属する（wa-na-ka-te-ro）」と同様に「ポトニア女神に所属する（po-ti-ni-ja-we-jo）」と形容される職人が記載されている。特にポトニア女神の冶金師集団は青銅配給文書で世俗の冶金師集団と区別されて原材料の配給を受けている。恐らく彼等は自らもポトニア女神崇拝者であり、またポトニア女神のために働く職人たちで、ポトニア女神に仕える祭司らの聖職集団内で儀式等に使用される製品を生産していたのであろう。同様に宗教儀式に必要な香油についても、ここでは香油製造職人の氏名が明記されて原材料の配給を受け、製品を作っている。このように王宮の聖所等では、王権の保護の下で男祭司・女祭司等を中心に聖職者集団が組織され、宗教活動を展開していたのであろう。

第２に古典期のアテナイでは、アテーナー女神を讃えたカルケイア祭（冶金師の祭り、Χαλκέια）が開催されたが、これはアテーナー女神が技術の神（その職能の１つに冶金がある）として崇拝されていたからである。ミュケナイ期にもポトニア女神は「冶金の女神」として、職人たちを守護する神として彼等に崇拝されていたことは十分にあり得る。

第３にポトニア女神は単独で記載される場合もあるが、「アスウィアaswiaのポトニア」のように地名の限定詞を伴うもの、「馬のポトニア（po-ti-ni-ja i-qe-ja）」のような職能の限定詞を伴うもの、「アテーナー・ポトニア（a-te-na po-ti-ni-ja）」の様に特定の女神に一致させるものなど表記は様々である。これはポトニアの語彙自体が特定の女神に一致するのではなく、元々はミノアの豊饒をも

たらす大地母神のような女神を指していたが、ミュケナイ人との接触により、印欧語族の神と習合され、後にはオリュンポスの女神とその職能に応じて融合していった結果、ヘーラーとかアテーナーとかの個別の女神となり、ポトニアの語が消滅していったと思われる。このように文書からもポトニア女神崇拝についての情報を得ることができる。

お　わ　り　に

宗教と王権の関係については、ホメーロスからはネストール王によって挙行されていたポセイドーン神へのヘカトンベ―祭の供儀の概要を知ることができるが、Un718ではサラペダにおいてポセイドーン神に数々の産品が献納されており、王権による公共祭儀が野外で定期的に行なわれていたことを示している。またTn316文書でも、ピュロス王国の重要な聖域があったスパギアーネス地区で、航海が始まる３月に王権が宗教儀式を挙行し、ポトニアをはじめ神々へ献納を行なってるが、ここで注目されるのがEsシリーズに見られるように、緊急時に臨時献納が行なわれていたことである。このように王権が統轄する役人たちによって王国内の支配領域から献納品を定期的・臨時的に徴発し、王宮の財産目録に記録した上で一旦収蔵庫で保管・管理し、王が統轄する儀式・饗宴などに際して必要に応じて王宮が支出していたと思われる。

また王宮内の複数に聖所があり、公的儀式と並んで私的儀式（秘儀）が行なわれていた。ポトニア女神はミノアの大地母神崇拝に起源するが、ポトニア崇拝も公的な儀式として行なわれていた。特にTn316ではスパギアーネス地区の聖域での供儀で、ポトニアをはじめ神々に黄金製品と並んで男女の人間が儀式の際の生贄として献納されている。文書の混乱した書き方からも、これは王宮の緊急事態下で執り行なわれる特別の供儀ために臨時に行なわれた献納文書で、当然ポトニア女神にも献納され、その聖所で上記の目的のための供儀が行なわれたのであろう。一方ポトニアに属する香油作りや冶金師集団が原材料の支給を受けているが、彼等はポトニア女神の崇拝者で、その女神の団体組織の

ために生産活動を行っていた。またこれらの職人たちの仕事場に隣接して王宮内に女神の聖所があるが、ここは王を中心に男・女祭司団等限られたメンバーによって執り行なわれる崇拝場所であると同時に、秘密の知識をメンバー内に限定して共有することで特別の能力や権威を維持するための私的儀式（秘儀）の聖所でもあった。このように王国崩壊数ヶ月前ではあったが、王権が崇拝儀式を統轄することで宗教を梃子に権力の維持を図っていたと思われる。

〈註〉

本稿で使用した線文字B文書史料は、E.L.Bennett, Jr & J-P Olivier, *THE PYLOS TABLETS TRANSCRIBED PART 1:TEXTS AND NOTE*, EDIZIONI DELL' ATENEO, 1973；E.L.Bennett, Jr., *The Pylos Tablets Texts of the Inscriptions found 1939–1954*, Princeton UP, 1955; M.Ventris・J.Chadwick, *DOCUMENTS IN MYCENAEAN GREEK*, Cambrigde UP, 1973[2]（以下*Docs*.と略記）; L.R.Palmer, *THE INTERPRETATION OF MYCENEAN GREEK TEXTS*, Oxford UP, 1963を使用した。

１）拙稿、「ピュロス王国におけるポセイドーン崇拝」『釧路論集』第10号、1978年、35–51頁（以下「ポセイドーン崇拝」と略記）；拙稿、「ミケーネギリシアにおけるポトニア崇拝」『釧路論集』第11号、1979年、41–57頁（以下「ポトニア崇拝」と略記）。

２）*Docs*., pp.125–129, 410–412.

３）Rodney Castleden, *Mycenaeans*, Routledge, 2005, p.143.

４）*ibid*., p.141.

５）S.Hornblower & A.Spawforth eds., *THE OXFORD CLASSICAL DICTIONARY*, 1996[3], pp. 1230–1231.; P. Chantraine, *DICTIONNAIRE ÉTYMOLOGIQUE DE LA LANGUE GRECQUE HISTOIRE DES MOTS*, 1974, PP. 930–931.；高津春繁、『ギリシア・ローマ神話辞典』岩波書店、1969年、261–262頁。;「ポセイドーン崇拝」、36–38頁。

６）拙稿、「ミュケナイ時代の宗教(1)―線文字B粘土板文書を中心に―」『愛媛大学法文学部論集　人文学科編』第22号、2007年、２－７頁（以下「ミュケナイ時代の宗教(1)」と略記）。

７）「ポセイドーン崇拝」、46頁。

８）J.Chadwick, *The Mycenaean World*, Cambridge UP, 1976, p. 92（安村典子訳、『ミュケーナイ世界』みすず書房、1983年）

9）Chantraine, *op.cit*., p. 932；「ポトニア崇拝」、42頁。

10）Cécile Boëlle, PO-TI-NI-JA:UNITÉ OU PLURALITÉ?, *AEGAEUM* 22, Liège, 2001, p. 403.

11）Laffineur,Robert & Robin Hägg eds., Potnia:Deities and Religion in the Aegean Bronze Age, Proceedings of the 8th International Aegean Conference 2000, *AEGAEUM* 22, Université de Liège, 2001.

12）「ミュケナイ時代の宗教(1)」、２－7頁。

13）Chadwick, *op.cit*., pp. 89-90.

14）Chantraine, *op.cit*., p. 931.

15）Chadwick, *op.cit*., p. 94.

16）Castleden, *op.cit*., pp. 155-156.

17）「ポトニア崇拝」、46頁。

18）*Docs*., pp.483-484.

19）C.W,Blegen, *The Palace of Nestor at Pylos in Western Messenian* Vol. 1, Princeton UP, 1966, p. 301-303.

20）拙稿、「ミュケナイ時代の宗教(2)―王宮の聖所を中心に―」『愛媛大学法文学部論集　人文学科編』第26号、2009年、３－５頁（以下「ミュケナイ時代の宗教(2)」と略記）。；C. W., Blegen, *ibid*., p. 299.；Castleden, *op.cit*., pp. 166-171.

21）Chadwick, *op.cit*., pp. 93-94.

22）Castleden, *op.cit*., pp.146-147.

23）Oliver Dickinson, *THE AEGEAN BRONZE AGE*, Cambridge UP,1994. pp. 291-292.

24）B.Rutkowski, The Cult Palaces of the Aegean, Yale UP, 1986, p. 180；「ミュケナイ時代の宗教(2)」、７-13頁。

25）Chadwick, *op.cit*., pp. 93-94は、ポトニアと冶金師との結びつきについてポトニアが火と冶金の神としてアテーナー女神の先駆者だったからとし、マリナトス教授がクノッソスの南に位置するミノア期のアルカロホーリ洞窟の発掘による出土遺物によって、ここが祭儀にも冶金師の工房にも使用されていたことを明らかにしたこと、またウィリアム・テーラー卿がミュケナイ城壁内の金属加工の仕事場に隣接するフレスコ画の部屋の発見したから、これはポトニアを描いたものとし、恐らくこの女神を信奉する冶金師集団が15世紀BCにミノア文明崩の壊に伴ってギリシア各地に四散し、すっかりギリシア化したその子孫たちが地母神崇拝を護り続けていたと指摘している。

本研究はJSPS科研費23520901の助成を受けたものである。